FREGA MEETS SUNDAR



FERDINANDO FREGA

フレーガ、スンダーに会う

THE COMPANY · 11

レッジョ・カラブリアからチェンナイへ、スンダー・ピチャイの足跡をたどって。

初めてその名を聞いたとき、私は本気で思った。クソ、いったいどこのどいつなんだ。誰もが彼の話をしていた。ナザレの男に取って代わりそうな勢いだった — ただし、2000歳ではない。まだ54歳で、インドと呼ばれるあの壮麗な土地から来ていた。

世界で唯一、英語の空気を吸いながら、アジアの文化と優雅さのなかで暮らせる場所。22の言語が混ざり合うなかに、15億人近くが定住している。

だが、話を戻そう。この名前は、ALPHABETという会社と結びついていた。それが何者なのかも、私は知らなかった。読み書きを学ぶ幸運に一度も恵まれなかった、世界の読み書きできない人々のためにつくられた、何かのコンソーシアムだろうと思っていた。やがて、まったくの的外れでもなかったと気づいた。まさにそれを扱っていたのだから — ただし、テキストも、読むことも、文学も、ウェブの中に住んでいて、そのウェブは二つのコードを使っていた。人間の十進法と、アルゴリズムの二進法だ。

私はその男を理解したくなった。そこでキプリングのように列車に乗り、レッジョ・カラブリアからボンベイまで旅をした。いまはムンバイと呼ばれている街だ。

行き先ははっきりしていた。南インドのタミル・ナードゥ州、チェンナイで私を待つ者たちがいて、ロッジの兄弟たちが泊めてくれることになっていた。イングランド・グランドロッジから下ま

で、誰もが知っていた。ブラザー・フレーガは月70米ドルで暮らし、誰かに何かを頼む習慣がないことを。

こうして、私はついに到着した。彼らは私を待っていて、自分たちの家へ連れて行ってくれたが、私は断って、代わりに部屋を借りようとした。3日間の滞在なら私の財力の範囲内で、予算にも収まった。

土地に慣れる時間は数時間しかなかった。そこへレグナータが迎えに来た。私たちはどこへ向かっていたのか？

インド工科大学マドラス校。

着くとすぐ、大学の最初の門をくぐったばかりのところで、一枚の標示が目に入り、稲妻のように私を打った。サンスクリットで書かれた彼らのモットーは、こう訳されていた：

成功は行動から生まれる。

私たちを迎えたのは二人の教授で、フリーメイソンの兄弟だった。私はすぐにスンダーのことを尋ねはじめた。彼らがまだ助手だったころ、スンダーはマドラスで学んでいたのだと思い込んでいた。

教授たちは、彼が誰かは知っていると認めた。もっとも実際には、彼が学んだのはカラグプルだった。だが、ここでは誰もが彼を仲間のひとりだと思っている、と彼らは言った。

何よりもまず、彼らは私たちがどこにいるのかを説明してくれた。ここはボストンのどこかの大学キャンパスとはわけが違う。私たちは信じがたい何かの内部にいた。インド工科大学マドラス校は、IBM Virgo Super Clusterによるスーパーコンピューティング能力も備えていて、97テラフロップスの計算能力を誇っていた。

それがいったい何を意味するのか、さっぱりわからなかった。コンピューターのことなど、私はクソほどもわからない。だが、うなずいた。彼らの口ぶりから、大事な話だということはわかったからだ。それだけで、私がそこにいる理由としては十分だった。

形式的なことが済むと、私たちはその場を離れた。レグナータが、私にサプライズがあると言った。私は言った。「女じゃないことを祈るよ。私は61歳で、もう若くはない。近ごろは、女性こそいちばん好きな会話のかたちなんだ。彼女たちの創意と知性から汲みとって、その両方を糧にしているからね」

これから女性に会いに行くのだ、と彼は言った。「でも安心してくれ、ナンド。セックスは関係ない。君が調べている人物のことを、彼女はよく知っているらしい。がっかりはさせないはずだ」

「それに、知ってのとおり、われわれはフリーメイソンである前に、品行正しい自由人なんだ！」

「ああ、でも服は着たままでいこう、頼むから」あはははははは。

私たちは彼女の家の門をくぐった。若い女性が迎えてくれた。25歳くらいだろうか。だが、スンダーの娘だとは思わなかった — 実際、彼女は私たちを待っている女性の姪だった。

彼女は私たちを迎え入れ、ソファに座らせた。お決まりの紅茶が出てきたが、良きカラブリア人として、私はいつ食事にするのかと尋ねた。2日間、水だけで過ごしていて、私の胃袋はすでにストライキ中だった。ここがイタリアではないことを、胃袋はまだ理解していなかった。

その女性はラーダと名乗り、すぐに私に率直な質問をしてきた。私が誰なのか、すでに知っていた。

私はレグナータのほうへ身をかがめて、ささやいた。「ラーダって、Zohoのあの人みたいな？」

すると彼は、表情ひとつ変えずに言った。「いや、あっちのほうが若い。こっちのほうが賢い」

彼女は言った。gillettenarrative.comの『Wilkinsonサーガ』をとても楽しく読んだのだと。20回は読んだかもしれない、ある箇所には自分の姿を見た — 叔母という人物の中に。それから、90歳だというのに圧倒的な女性の魅力をたたえて、そこに書かれていることはすべて本当なのかと私に尋ねた。

私は簡単な冗談で答えた。真実と嘘は人生の二つのアルゴリズムで、そのあいだにナラティブがある。ナラティブとは、それを書くただひとりの人間の、目に見える表現であり続けるものだ、と。

彼女は微笑んだが、驚きはしなかった。それが私に言える唯一の答えだった、と彼女は言った。その答えは、口にせずして私が何者かを明かしていた。だからこそ、スンダーについての情報をくれるのだと。

小さいころ、彼はいつもゼロを100個描いていて、誰にもその理由がわからなかった。ある日、彼はその前に1を置いた。私たちは、それが彼の将来の銀行口座を表しているのだと思った。30年後、彼はまさにその名の会社で働いていた。Google。1のあとに0が100個続く数、グーゴルから取った名だ。

誰もがいつも、この欠陥を母親の速記者という仕事のせいにしようとしていた。だが、それはまだ始まりにすぎなかった。今日の私たちにはわかる。彼が生まれ持った欠陥は、完璧さそのものにほかならなかったのだと。

信頼できる筋から聞いた話だ。ある日、相変わらず好奇心旺盛な母親が息子に尋ねた。どうして銀行は、ゼロが12個も並ぶ残高を送ってこられるのか、と。息子は答えた。「数字は手書きの筆記体で書いているんだよ。場所が足りないからね」

話のあいだじゅう、その女性と私に付き添う兄弟 — 彼もまた年配の男だった — が、しばしば意味ありげな視線を交わしているのに私は気づいた。だが私は自分のしていることだけに集中していて、立ち止まって彼らの行動コードを解読しようとはしなかった。

ラーダによれば、スンダーは昔から誰にでも好かれ、その優雅さと知性と魅力ゆえに、女性たちがよく彼に付き添っていたという。ほとんど私の肖像だ。懐具合の違いさえなければ。

頃合いが来ると、私は65か国をめぐる40年の旅から、いくつかの話を語った。ひとつの人生の物語、冗談、冒険。女性はすっかり引き込まれたようで、私たちを夕食に招いてくれた。だが私は、礼儀正しく、受けるべきではないと判断した。まだ心の準備ができていなかった。

帰りぎわ、彼女は小さな紙切れを私に渡して言った。「ナンド、いつでも好きなときに手紙をちょうだい。あなたからの便りは、とても嬉しく受け取るわ。それから、叔母さんと呼んでくれていい — 誇らしく思うから」

レグナータは狂ったように笑っていて、私にはその理由がわからなかった。あんな場面に出くわしたのは少なくとも30年ぶりだ、と彼は言った。私はホテルまで送ってくれと頼んだが、その前に、好奇心に負けて彼に尋ねた：

「ちょっと聞くけど、君の奥さんは何の仕事をしていたんだい？」

彼は考えもせずに答えた。「速記者だったよ」

私は爆発しそうになったが、こらえた。そこで、ホテルの近くで降ろしてくれと頼んだ。食べる場所は自分で見つけるし、翌日には発つつもりだった。

ほかに何か要るものはないかと彼が尋ねたので、私は、機会があればいつでもカラブリアの私の家に来てくれと誘った。喜んでも

てなすつもりだった — 私たちカラブリア人が世界のどこででも見事にやってのけることを、見せたかった。

だが、この物語の登場人物たちは、本当は何者だったのか？

実在の人々だ。どこから来たのか、私は一度も尋ねなかった。ただ、その存在を受け入れた。61年間、私はずっとそうしてきたのだから — そして、世界は私を忘れないと確信している。

そして、インドの婦人がくれた小さな紙切れの中には、こんなメッセージが書かれていた。「いつでも好きなときに、私のところへ戻ってきて。あなたをいつでも歓迎する」と。いちばん下には、彼女の住所があった。

翌日、私は駅へ戻った。列車はなかなか出発しようとしなかったが、理由はわからなかった。私を待っていたのかもしれない。あるいは、わかっていたのかもしれない。『私のアフリカ』のあとなら、カラブリア人にだって『私のインド』があっていいのだと。

フェルディナンド・フレーガ
BLADEFREGA · 書記ナンド